

各地の取り組み 大阪府箕面市

お母さんの思いを聴き寄り添うことを大切に

箕面市子育て支援センター 保育士 米山 玲子

支援センターの取り組み

私は、箕面市の子育て支援センター(以下「支援センター」といいます)で勤務しています。箕面市は大阪府の北部に位置し、「明治の森箕面国定公園」があり、紅葉と滝、そしてお猿さんが有名で、大阪でも自然が多いところです。

勤務する支援センターでは、自由に来て遊んでいただける「オープンスペース」や年齢限定のプログラムなどを毎日開催し、多くのお母さんたちが利用してくれていますが、市内に3か所しかないの、支援センターから遠い地域には「出張子育てひろば」として車いっばいのおもちゃを持って、地域の会館などに出かけていったりもしています。

私たち職員は、お母さんたちと一緒にいる中で、お母さんたちの思いを聴き、寄り添っていくことを大切にしたいといつも話しています。お母さんたちは答えを求めて相談されることもありますが、「そうやったん。大変やったね」と私たちが話を聴いているだけで、表情が柔らかくなることも多々あります。気持ちが落ち着くと『私も怒ってばっかしやったな』と自分を振り返ってみたり『次こうしてみよう』と方法を考えついたりすること。このように、子どもの姿を一緒に見ていきながら、成長の喜びや子育ての楽しさも伝えていきたいなと感じています。

これだ!

支援センターでは、2007年からNP(Nobody's Perfect)プログラムを行っています。当初は参加対象を『0歳~就学前の子どもを持つ保護者』としていました。しかし0歳児のお母さんが参加したときに、ほかの参加者とは関心ごとが違うので、話を聞くことが多くなり、共感し合えることが少なかったのでは…と感じ、次の年からは参加対象者を『1歳~就学前の子どもを持つ保護者』とした経過がありました。

また、他のプログラムとして、自由に来ていただける『0歳児オープンスペース』を毎月1回行っています。「赤ちゃん訪問」が始まったこともあってか、参加人数が増え、初めて訪れる月齢も低くなってきていました。来られる方を見ていると、『誰かと話したい!』『お友だちがほしい!』という様子で、同じくらいの月齢の赤ちゃんのお



母さん同士で楽しそうに話をされていました。

そこで職員への質問として出てくるのが、「授乳って何時間あげなければいけないの?」「寝返りってどういうふうにするの?」「上手に抱けない」「どうやって子どもと遊んだらいいの?」など、赤ちゃんへの関わりかた、成長発達に関すること以外にも「この季節どんな服装にしていたらいいの?」「みんな毎日どうやって過ごしてるんやろ?」など、日々の生活に関する事柄も多くありました。私たちと話すよりも、お母さん同士の方が情報交換になっていいのではないかと思うことも多くあり、「〇〇さんはどうしてる?」とお母さん同士をつないで話をしてもらったりもしていました。

支援センターに来られるお母さんたちを見ると、赤ちゃんへの関わりかたがよくわかっていないんだろうな、不安なんだろうなあとと思うことがよくあります。

これらのことから、支援センターの職員間で、『0歳児のお母さんたちはお出かけできる場所を求めている』『お友だちを作りたいと思っている』『いろいろな情報を得たいと思っている』『そんなお母さんたちにいろんなことを伝えたい』と感じていたところに、KKI(注:本会)で赤ちゃんのプログラムを考えているという話がありました。すぐに「これだ!」と、職員3名が自費でBPファシリテーター養成講座を申込みことに!そして、1期生として参加をすることになったのです。

今思えばすごいこと

2011年度は、上司の「GO!」も出たので、すでに組まれていた年間予定とにらめっこし、あいている期間をみつけて年間3回の実施をすることにしました。こんなにすぐに実施できたのは、支援センター来所者のケースなどについて職員間で日頃からよく話をし、支援センターとしてできることをやっていきたいという思いを共有できていたからではないかと思えます。今思えば、本当にすごいことだと感じています。

保健師や赤ちゃん訪問スタッフにもプログラムの説明をして、それぞれの関わりの中からプログラムを勧めてもらえるようにしました。初回は進行もですが、慣れないパソコンやプロジェクターたち機械との戦いが緊張をさらに大きくしたようにも思います。回数を重ねるごとに、慣れてはいくのですが…。ドキドキの初年度でした。

そして、NPを経験していた私たちは、NPとの違い(もっと深く話し込まなくてもいいの?赤ちゃんがいる中で話できてるのかな? など)

子どもの成長に自分で気づく素晴らしさ

へのとまどいも正直ありました。このとまどいも、プログラムを理解していくと共に解消されていきました。参加したお母さんたちからは、「本当に参加できてよかった」の声がたくさんあり、プログラム後も集まったり、みんなでお出かけしたりしたことを支援センター来所時に聞かせてくれました。そして、何より、子どものことをお母さん同士で相談し合っているのを見ると、とてもうれしく『やって良かった!』と感じ、これからも続けていきたいと思いました。

NPO のスタッフと協働して

B Pを始めて今年で5年目。今では年に8回、定期的実施しています。2回の参加申し込み機会があるようにし、年間予定のチラシを赤ちゃん訪問や母子手帳交付窓口で配布してもらっています。当初からF A (ファシリテーター) 2名で、定員は12名にしていますが、希望者が定員より多いということもしばしば。希望する人全員に参加してほしいということから、多少の定員超えで実施もしてきた中で、16名定員の実施にも自信がもてたので、今年度途中より定員を16名に変更し実施しています。

私たち支援センターのスタッフは市の職員なので、職場異動があります。今までもNP、B PのF A認定を受けた後に、異動になった者もいます。また新しい職員が認定を受け…の繰り返し。これではプログラムを継続していくことや回数を増やすことの難しさがあると感じ、日常的に協働しているNPOのスタッフの方などに公費で養成講座を受講してもらい認定を受けてもらってはどうかということになり、翌年度からはそのための予算を計上していくことにしました。

支援センターの職員は、プログラムに参加した人を継続して見守っていけるという利点があるので、NPOの協力を得て実施するときは、職員とペアで行うようにしています。

日常の支援センター利用につながってくれる方ばかりではないですが、場所を知ってもらい、人を知ってもらって、何かの時には足を運びやすい場所としてあげたいと思っています。

参加者の変化

私も年に2回ほどF AとしてB Pを行っています。回を重ねるたびに、『うまくできてるなあ、B Pって』と思うことが多々あります。

たとえば、1週間の振り返りを毎回初めにします。私は初めの頃、お母さん自身がこの1週間をどう感じて、どう過ごしたのかを聞いたかったです。そうあるべきなのかと思っていました。

ところが、「パパにも見てもらって・・・」とか「部屋の環境の見直しをしました」などの話も出てくるのですが、「この1週間で寝返りができました」「よく声が出るようになりました」など赤

ちゃんの変化を話される方が多いんです。『ありやちや赤ちゃんのことか・・・』と思っていた私でしたが、アンケートの感想に『子どもの1週間ごとの成長に気づくことができました』というように内容が書かれていて「あっ! これが大切なことなんだ」と感じました。ほかの赤ちゃんの姿を聞いて、じゃあ自分の赤ちゃんは? と意識して見るようになるんですね。ゆっくり、赤ちゃんの姿をみる余裕さえなかったり、意識さえしていなかったら『成長を喜ぶ、喜び合える』という子育てのうれしさ、楽しさを知らずに過ぎていってしまっていたかもしれません。そこに気がつくことができるって、すごいなあと思いました。

ほかにも、ちょうど次のテーマになっているようなことが、タイミング良く、一言の中に出てくるんです。『うまく、次につながるなあ』と感心していた私です。

そして何より参加した方たちの表情の変化です。赤ちゃんを連れてひとりで出かけることに自信も出て、色々なところに積極的に出かけていったり、人とつながることが上手になるのか、B Pの仲間ではない人ともつながっていきたり、自分の楽しみを見つけられたり。

そうでない人も、もちろんいると思います。そこは、先にも書いたように、箕面市として行っているプログラムの利点として、ほかの機関とも連携しながら見守っていかなければと思っています。きっと、子育ての大変さはこれからだろうけれど、そのときに相談できる人がいる・場所があるというのは大切なこと。そのつながりをB Pは作ってくれています。

少しずつ浸透

今、B Pの申込みされる人たちは、市の広報紙で見たり、赤ちゃん訪問で紹介してもらってという人が多いのはもちろんなのですが、『友だちからいいよって聞いたから』とか、『B Pプログラムでつながっている人をみていいなと思ったから』という人が増えてきています。箕面市の中でB Pプログラムも少しずつ浸透してきているのかなと感じています。

現在、箕面市では対象者の20%くらいの方が参加してくれています。年間8回ではそれが精一杯です。今は市内2か所ですが、もう少し開催場所・回数を増やせたら、受け入れられる人数も増えます。すぐにとはいかぬかもしれませんが、できるだけ多くのお母さんたちにB Pが届けられるといいなと思っています。

